

地域とともに歩む—文化遺産学交流会を振り返って—

中尾 和昇

関西大学なにわ・大阪文化遺産学センター（以下「なにわ」）は、文化遺産の調査・研究を通じた地域との連携を活動の大きな柱としてきた。その活動における基軸と言えるのが、社寺に伝存する文化遺産の調査・研究である。なにわでは、これまでに道明寺天満宮（藤井寺市）や杭全神社（大阪市平野区）の宝物調査を行ない、道明寺天満宮の宝物に関しては、なにわ・大阪文化遺産学叢書として図録を刊行している（2007年3月）。しかし、単なる宝物調査に終始しては、「文化遺産」の裾野を広げるに足る研究とはならない。さらに言えば、「文化遺産学」を構築することには繋がらない。そこで、「文化遺産学」と「地域連携」について議論する場が必要になってきた。しかも、その議論は決して内向きのものではなく、地域連携を掲げている研究センターとの交流を図るものでなければならない。こうしてスタートしたのが、「文化遺産学交流会」である。

第1回目の交流会の相手となったのは、東北芸術工科大学東北文化研究センター。なにわより早い1999年に活動がスタートし、オープン・リサーチ・センター整備事業も2期目に突入している。お招きした菊地和博氏によれば、東北文化研究センターという名前を掲げる以上は、東北の実態を真摯に受け止め、研究者として何ができるかを見つめ直さなければならないという。そこには、文化を継承したくても、それを担うべき人間がいない、東北という地域の実情が背景として存在している。それとは対照的に、担うべき人間がいるにもかかわらず、自分たちが育んできた文化を見失っているのが大阪である。地域性が連携のあり方にも違いをもたらすことを認識させられた。

続く2回目の交流会では、神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターをお招きした。地域連携センターでは、「大学は歴史文化の担い手である」という理念のもとに、地域の人々とともに自治体史を編纂したり、水害により被災した史料の保存・活用による地域活性化を提案したりと、特徴のある活動がなされている。この地域連携センターと議論していくなかで、なにわとの取り組み方の違いが鮮明になった。ひとつは連携の対象。地域連携センターは自治体との連携を中心としている。しかし、なにわでは連携する相手を特定することなく、幅広い交流関係をもっている。もうひとつは、取り扱う〈モノ〉の違い。地域連携センターでは古文書などの「史料」を軸としているが、なにわでは文献資料にとらわれずになにわ伝統野菜や神社のお祭りなども「文化遺産」としてとらえている。しかし、それぞれに強み・弱みがあるので、どちらが優れているかという議論にはならない。

3回目は、佐賀大学地域学歴史文化研究センターが交流の相手となった。これまでは、なにわにお越しに来てきたが、この交流会では佐賀大学を訪問する形での開催となった。新たな学問体系である〈地域学〉の創造を掲げた、「文理融合型」の研究センターが設立されたのは、2006年4月。考古学、国文・文献学、洋学・思想史、地域史・史料学の4つの研究部門で構成されているが、なかでも洋学・思想史という研究部門は、このセンターの特徴であると言える。佐賀という地域は、「小城鍋島文庫」に見られるように洋学が盛んで、西洋近代文明受容の拠点であった。そこで、医学史がご専門の青木歳幸氏を中心に、佐賀の歴史文化における洋学の関わりを解明するための研究が進められている。まさに、「文理融合」「地域学の創造」を目指しているこの研究センターの強い意志が感じられる。逆になにわでは人文系、特に歴史学系の研究者が中心であるため、どうしても研究に偏りが生じてしまう。幅広い分野からの人材登用が必要だということが鮮明になった。

これらの交流会は、「文化遺産学」における「地域連携」のあり方を考える材料を提供してくれたように思う。しかし、「文化遺産学」に答えがあるわけではないし、これまでの5年間で、必ずしも正しい道を進んできたわけでもない。一人一人が自分なりに、なにわ・大阪の地に眠っている「文化遺産」を発掘し、「文化遺産学」を築いていくことが、最善の道ではないだろうか。